西洋へ真っ向勝負

第5回絹谷幸二賞

若手画家を応援し、具象絵画の可能性を広げることを目的にした第5回絹谷幸二賞（毎日新聞社主催、三井物産協賛）は、橋爪彩さん（32）に決まった。奨励賞には今津景さん（32）が選ばれた。贈呈式は3月13日、東京都千代田区の学士会館で行われる。

「Flora」 2011年、パネルに白亜地、油彩、高橋コレクション所蔵 ©Sai HASHIZUME, courtesy of imura art gallery

橋爪彩さん

はしづめ・さい 1980年、東京都生まれ。東京芸術大大学院修了。2004年、シェル美術賞佳部あおみ審査員奨励賞。東京都在住。 ＝藤原亜希撮影

画家は職業ではなく、運命――。セザンヌのこの言葉に共感し、自らを奮い立たせてきた。受賞の報をうれしくも、ほっとしました。20代前半での評価はビギナーズラックでしたが、苦行を経た今は、筋力がついたと思えますから」と受け止める。

「苦行」とは、大学院修了後の4年半にわたる欧州留学。「理論的な部分を強化したい」と、あえて嗜好の異なるドイツへ飛び込んだ。西洋絵画を批評的に見る目を養い、帰国後、「エトランゼ（異邦人）である私が絵画を描き替える」趣旨のシリーズを開始。有名絵画の構図や登場人物を引用しながら、「今」を写実的な造形で示してきた。

本賞の評価対象は、昨年、東京のポーラミュージアムアネックスで開かれたグループ展く、イムラアートギャラリー京都での個展で発表した作品群。当初は「エトランゼ……」シリーズが核となる予定だったが、準備中に東日本大震災が発生。「今後、何を描くべきか」と思い悩んだ。

「『絵画そのもの』をテーマにすることは変えられない」と思い定め、完成させた作品の一つが「Flora」だ。震災報道には、精神的にタフな女性の活躍にひきつけられた。

そこで、ルネサンスの画家ボッティチェリの代表作「春」に登場する女神を引用。さらに、産む性の力強さの象徴として「筋肉の塊」を画に加えた。自分らしい表現に到達できた、と手応えを感じた。

「日本のペインティングは私が支える、という気持ちで仕事をしています。アジアという『特別枠』でなく、西洋の土俵で、正面から闘っていきたい」。受賞で、決意はより強固になった。【井桂子】

「若手応援」08年に創設

日本を代表する画家の一人で日本芸術院会員の絹谷幸二さん ＝写真＝が2008年、賞の創設を毎日新聞社に呼びかけ、創設。絹谷さんは1974年、具象絵画の登竜門であった安井賞（96年度の第40回で終了）を、当時最年少の31歳で受賞。画家として生きる自信を得たという体験から、「若い世代を応援したい」と思い立った。創作の傍ら、東京芸術大などで後進の指導にも力を注ぎ、現在は大阪芸術大教授を務める。

賞の対象は35歳以下の画家。国内で前年に開催された展覧会で発表された、具象的傾向の出品絵画を選考する。賞金は本賞100万円、奨励賞50万円。

■選評

腰の据わった本格派

山下裕二・明治学院大教授

前回と同様、まったく作風が異なる二人に賞を授与できたことが喜ばしい。この賞は特定の傾向にあてはまる作家を称揚するためではなく、さまざまな方向性で真摯な表現を突き詰めている若手を勇気づけるために運営されるべきだから。橋爪彩さんは、ハイヒールに象徴されるいまどきのガーリーな装いにこだわりながら、あえて顔を隠すことによって不安感をあおり、静謐きわまりない画面をつくりだす。長く注視してきたが、ここ数年の表現、技法の深化は著しい。今津景さんの場合、一点だけ見たのではコンピュータによる画像処理を駆使したありがちな作風ととらえる人もいようが、近作では一点ごとにさまざまなコンセプト、技法を駆使して試行錯誤しており、さらにスケールの大きい作家になることが予見される。二人とも、腰の据わった本格派だと思う。

鍛えられた張りと艶

OJUN 画家・東京芸術大准教授

橋爪彩の絵はモティフやテーマの特異性がよく取り沙汰されるが、一番の見どころは画面表層の強さだ。鍛え上げられた張りと艶は絵画としての「質」を雄弁に物語っている。これほどの表面ならば、どんな架空も盛れるだろう。今回の候補作品の中では群を抜いていた。今津景も筆力のある画家だ。身辺に目を注ぎ一気に都市の全景を俯瞰し、さらに泰西名画まで接近、横断、展開させる視線の自在さは痛快だ。ただ色の使い方なのか、全体が染まっている感じが惜しい。二人とも受賞に相応しい力と資質に恵まれている。これからの困難が楽しみだ。

他には近藤亜樹。描きのエッセンスが詰まっている。何か予感を覚える。浅井裕介。この万物雑然の“痕跡”の先を見たい。

強いまなざしで圧倒

原久子・大阪電気通信大教授

多彩な顔ぶれの中から最終選考に残った橋爪彩は、圧倒的な描画力と人間を見つめるリアルなまなざしの強さで他を引き離した感があった。時には美術史を逆手にとるように静物画の構図を借り、時には同じ女性であっても胸を抉られるような緊張を描いて赤裸々に女性性を出すが、絵に気品がある。今津景は幾重にもレイヤーをつくり出し、錯雑としたなかに光が見えるようなイリュージョンを生み、橋爪とはまったく異なる方法論で絵を読む快感を与えてくれた。推薦作家のなかには何人もの日本画材を用いる、或は日本美術を意識する優れた方がいた。洋画（油絵）、日本画を分けて教育する教育機関が日本には多いが、作家が自ら垣根を越え語り語りと活動する姿に好感がもてた。

■選考過程 候補に23人

毎日新聞社が、若手画家の作品に詳しい全国の美術関学芸員や美術評論家、ジャーナリスト49人に推薦依頼を発送。25人から回答を得た。候補として推薦されたのは25歳から35歳までの23人（うち2人はそれぞれ2人から推薦）で、女性が17人を占めた。

候補者にポートフォリオ（経歴や作品写真をまとめたファイル）を送ってもらい、事務局が選考委員3氏に発送。選考委員はそれらを精査し、開催中の展覧会で作品を鑑賞可能な場合は、足を運んで実物に接した。

1月中旬の1次選考は、各委員が気になった画家を挙げるところから開始。その後、全候補者について議論を重ねた。オリジナリティーに優れている、または部分的にでも目を引く点があるとして、浅井、今津、岡田、近藤、五月女、田中、橋爪、廣田、増田、松井、村山、森田が2次選考へ進んだ。必要に応じて、選考委員が各候補者のアトリエや所属画廊を訪問、実作品をチェックした。

2月初旬の2次選考では、最初に各委員が評価する2～3人を提示。ここで、1次選考でもリードしていた橋爪と今津に評価が集中。他に名前が挙がった村山と松井、近藤、浅井についても再度議論がなされたものの、橋爪か今津への授賞で一致した。「描くことの緊張感」「絵肌の突き詰め具合」などが評価され、橋爪が本賞に。今津は「アンバターンに陥らず、大きな変化をもっている」などと評され、奨励賞に決まった。（敬称略）

◇推薦された人たち

浅井裕介、池田陽一、今津景、岡田真希人、桜間晴幸、北村佳奈、黒木南々子、幸田千依、児玉美咲、近藤亜樹、五月女哲平、田中武、中田朝乃、新田友美、橋川彩、服部しほり、服部知佳、廣田美乃、増田佳江、松井えり菜、村山春菜、森田加奈子、和田典子

◇回答を寄せた推薦者

池上司、小川敦生、菊良直樹、加藤義夫、岸桂子、児島やよい、小吹隆文、渋沢和彦、高橋秀爾、竹口浩司、中井康之、名古屋覚、西隆美子、野地耕一郎、拝戸雅彦、土方明司、藤田一人、本田代志子、松井みどり、村田真、森本悟郎、山口裕美、山本冬彦、和田浩一、渡辺亮一

（いずれも50音順、敬称略）

「光」から新境地

奨励賞 今津景さん

「Olive,Gray,Yellow」 2012年、キャンバスに油彩 ©Kei IMAZU,courtesy of YAMAMOTO GENDAI

いまづ・けい 1980年、山口県生まれ。多摩美術大大学院修了。2009年、VOCA展佳作賞。神奈川県在住。 ＝矢頭智剛撮影

昨夏、東京の第一生命南ギャラリーで開いた個展。一人の画家の手になるとは思えないほどバラエティーに富んだ、新作十数点を発表した。

「もともと『自分の絵』がないんです。決めなくても、自ずと変えてきました。だが、『私って何やっているの？』という不安」も終始つきまとう。「だから、受賞は本当にうれしい。いろんなことにチャレンジするのでいいんだ、という勇気をいただきました」と笑顔を見せる。

自ら「面白かもしれない作品」と感じるのが、3連作「Olive,Gray,Yellow」だ。東日本大震災での体験をもとに描いた他の作品からは離れ、西洋美術史へ分け入った。「モナ・リザ」の背景や、実際に目にした光景などを題材にしながら、「筆のタッチや画肌感などといろいろ工夫して、西洋絵画における『光』に迫りました」。結果、絵画の表現領域を自ら広げたという実感をもつことができた。

虚と実のあわいを探るような作品群で近年、評価を高めている。写真編集ソフトを駆使し、パソコン上で構図を決めてから制作に着手する「今どきの」若手。だが「絵肌が本当に面白い。ものとしての強さ、絵肌の魅力。描き手の躍動感を出せます」と語る。

「今後、やってきたことと全くが一つの輪になれば、と願っています。だからこそ、今は一枚でも多くの作品を描かなくては」と、気を引き締めている。【井桂子】